

追 悼

自然保護の活動家として、博物館の先輩として

関西自然保護機構副会長 山 西 良 平

1977年に私が大阪市立自然史博物館に就職してから数年経った頃、設立後間もない関西自然保護機構の事務局が当時の千地万造館長のもとに置かれていました。自然保護の研究や活動は動植物学や生態学の研究者が担うものだという固定観念にとらわれていた私には、地質学者である千地さんがこのような団体の世話を引き受けられるということがとても新鮮でした。お聞きしたところによると、設立当時は吉良竜夫先生の“かばん持ち”をして関西の企業をまわり、維持会員を勧誘し、基金を募るために奔走されたとのことでした。当初、関西自然保護機構は財団法人化を目指していたのですが、残念ながら実現しませんでした。このような“企業まわりをする団体活動家”としての一面は、学者としての千地さんの風貌からはなかなか想像しがたいものです。設立時のご苦労には頭が下が

ります。

千地さんとお付き合いは、博物館の採用試験の面接から始まります。そして博物館に在職されていた1986年まではもちろん、博物館を去られてからも関西自然保護機構の活動を通じて続けました。関西自然保護機構が大阪自然史センターに合流する際に繰り返し議論をしたことは、きのうのことのように思い出されます。

しかし私にとっての千地さんは、やはり何と言っても博物館の先輩であり、ひとつ屋根の下で、市民に親しまれる大阪の博物館活動の流儀を仕込んでくださった恩人です。「博物館を良くするのも悪くするのも学芸員だ。学芸員は責任をとれ！」と若い学芸員を奮い立たせ、しかもものびのびと仕事をさせてくださいました。私が館長になってからもいろいろ相談に乗っていただきました。

若いころからフィールドワークで日本各地を歩きまわり、海外も広く見聞され、また研究者、博物館関係者との交友も幅広く培っておられた千地さんは、話題が豊富で尽きることがありませんでした。ゆったりとした口調で、話し始める前に少し間をおいて聞き手を集中させる話術は独特のもので、今でも千地さんを思い出すとその話しぶりが目に浮かび、今日は何を話されるのだろうかと少し緊張してしまいます。長い間ほんとうに有難うございました。



図1. 梅棹忠夫氏（手前）との対談にて（2001年9月15日、大阪市立自然史博物館）。